

2024年3月31日 復活祭

主題「復活のイエスと出会う」

ヨハネの福音書 20:11-18

序

みなさん、復活祭、イースターおめでとうございます。このキリストの復活の朝、共にキリストの復活を祝い、喜ぶことができることを感謝いたします。

さて、それでは今日は復活したイエス・キリストとマグダラのマリアの再会からみことばを聞いていこうと思います。「復活のイエスと出会うとは何か」をみことばから共に考えていきたいと思います。

1. マリアの悲嘆

聖書にはイエスの母マリアをはじめ、たくさん「マリア」が登場します。新約聖書では6人のマリアが登場しています。その中で、今日出てくるのは、マグダラのマリア。今日はこのマリアと復活のイエスの出会いから教えられていきたいと思います。彼女がどんな人であったかについては、ルカの福音書8章1節～3節に書かれているので、お読みします。

その後、イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられた。十二人もお供をした。また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒にあった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。

このマグダラのマリアは悪霊をイエスに追い出してもらい、そのことをきっかけにしてイエスに仕えるようになった女性でした。悪霊に苦しめられていたところをイエス様に助けてもらい人生が変わったマリア。このかけがえのない出会いを通して、マリアはイエスの弟子となり、一緒に旅をし、イエスに仕えていた。しかし、あろうことか自分を苦しみから救い出してくれたイエスは十字架につけられて殺されてしまった。十字架にかかるイエスを目の前にした女性たちのことがこのように書かれています。ヨハネの福音書 19章 25節。

イエスの十字架のそばには、イエスの母とその姉妹、そしてクロパの妻マリアとマグダラのマリアが立っていた。

十字架の前でただただ立ち尽くすマリア。人生の拠り所であるイエスが目の前で殺されてしまった。しかも、墓に葬られたはずのイエスの遺体がなくなってしまった。愛するイエスの死に続いて、その亡骸（なきがら）までなくなってしまった。一体何が起きたのだろうか、私の大好きなイエス様はどこに行ってしまったのか。ヨハネの福音書 20 章 11 節では、この時のマリアの思いを端的に表しています。11 節。

マリアは墓の外にたたずんで泣いていた

この「泣いていた」という言葉は、ただ泣いていた、のではなく、嘆き悲しみ、大声で泣いていた、という意味があります。悲しみのあまり、苦しみのあまり、嘆きに押しつぶされるかのように泣いていた。それも墓の前にたたずんで。この「たたずんで」、という言葉。これは先ほどお読みした 25 節の十字架の前での女性たちが「立っていた」という言葉と原語を見ると同じ言葉です。つまり、マリアの心は、十字架でのイエスの死から、時が止まり、動くことができず、ずっと立ち尽くしている状態であった。さらに、イエスの遺体がなくなってしまったことで、悲しみに拍車がかかり、たたずんで、大声で泣いていたのです。

その悲しみは、12 節で御使いを見つけたマリアの様子からも分かります。墓の中をマリアがのぞき込んで見ると、御使いがいたにも関わらず、驚くどころか、イエスの遺体はどこにあるのか、という関心に心が囚われている。普通なら驚くはずの「御使いがいた」、という事実よりも、イエスの遺体がなくなってしまった、という悲しみが彼女の心を占めていたのです。痛々しいほどに悲しみに打ちひしがれてるマリア。私たちはこの悲しみをどれほど感じるのでしょうか。イエスが死ぬということがマリアにとってどんなことであったか。愛するイエスの遺体に香料を塗ってあげたい、今さら何もできないけれど、せめてもの弔いをしたい。行き場のない悲しみを携えてやってきた矢先に、あろうことか遺体がなくなってしまった。たたずみ、嘆く彼女の心と、その状況を想像して欲しいのです。

2. イエスの問い

そのようなマリアの後ろによみがえられたイエスが来られた。しかしなぜか、14 節にあるようにマリアはイエスだと分からなかったのです。そんなマリアにイエスは 15 節でこのように尋ねられます。

なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。

このイエスの問いというのは、ある意味分かりきった質問です。イエスは当然、マリアがなぜ泣き、誰を探しているのか、知っている。それに対して、マリアはこのように答えます。

あなたがあの方を選び去ったのであれば、どこに置いたのか教えてください。私が引き取ります。

この時マリアはイエスを園の管理人だと思い込んで、イエスの遺体の在り処を知っているなら教えてほしいと言うわけです。遺体でもいい、愛するイエスのそばに居たい、必死なマリアの様子がここにある。しかし、ここで一つ考えたいのは、マリアは懸命にイエスの遺体を探しているわけですが、果たしてイエスの遺体が見つければ、このマリアの悲しみは解決されるのだろうか。

そうではないことは明らかです。たしかに埋葬されたはずの遺体が無くなるというのは大変なことです。見つかったら安堵感も得られるかもしれない。しかし、イエスの遺体が見つかったとしても、「イエスの死」という現実がある限り、マリアの悲しみを解決することはできないんです。かえって、イエスの遺体を前にするならば、愛する者の「死」という現実が深く辛く迫ってくるはず。しかし、マリアはそのことには気づかず、とにかく、遺体を見つけなくては。せめて遺体でいいからすがりたい。そのような思いに捉われていた。

そんな彼女にイエスは、一言「マリア」と呼ばれたのです。これまで旅を共にする中で、何度も、何度も呼んでくださった、いつもの聞き慣れたイエスのあの声で。「マリア」、と。その名を呼ばれた。それに対し、マリアは「ラボニ」、つまり先生と返した。この「マリア」と「ラボニ」というのは普段お互いが呼び合っていた言葉でありました。さっきまでよみがえられたイエスに気付かなかったマリアでしたが、「マリア」といつものように名前を呼ばれると、自分の名を呼んだ方がイエスだと気づいたわけです。この時の情景を想像してみたいんです。イエスの遺体を必死で探していたマリア。しかし、そこには死んでしまったイエスではなく、よみがえったイエスがいた。そして「マリア」と、私の名前を呼んでくださった。これは、マリアの想像をはるかに超えた悲しみからの解放でした。

イエスの遺体が見つかることよりもはるかに素晴らしいことが起きた。復活したイエスが、「マリア」と呼んでくださり、目の前に現れ、共にいてくださるというこの現実。彼女のこれまでの悲しみ、絶望は消え去り、希望と喜びが彼女の心を覆ったんです。

17節を見ると、マリアは、イエスにすがりつこう、抱きつこうとしている様子が分かります。これまでのマリアの心情を考えれば現在の反応だと思います。もう決してイエスを失いたくない、そう思ったはずですが、しかし、イエスは、すがりついてはいけない、とマリアを止めるんです。その理由については、今日は詳しくは触れませんが、神の救いのわざがまだ完成されていないから、まだ途中であるからだ、とイエスは言うわけです。復活したイエスが天の父のもとに行くことによって救いは完成するんだ、と。だからわたしにすがりついてはいけないと、マリアに言われたのです。

さらにイエスはここで、マリアに使命を与えられます。それは、17節後半の『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』ことを弟子たちに伝えなさい。つまり、よみがえったイエスが、天の父であり、神である方のもとへ上ること、つまり神の御子、救い主の使命の完成を弟子たちに伝えなさい、という重要な使命をここで与えたんです。これを聞いたマリアは、18節。

マグダラのマリアは行って、弟子たちに『私は主を見ました』と言い、主が自分にこれらのことを話されたと伝えた。

悲しみに打ちひしがれ「たたずんでいた」マリアが自らの足で「行って」「伝え」る者へと変えられた。止まっていた彼女の「時」がイエスによって、再び動き出した。マリアは復活のイエスと「出会い」、イエスが死から勝利され、今も確かに生きていて、一緒にいてくださることを知った。そして、イエスから与えられた使命を全うするものへと変えられた。そこには、イエスの十字架を目の当たりにし、死に絶望し、動けなくなり、「たたずんでいた」あのマリアはもういないんです。

結論

今朝は十字架の前で立ち尽くし、墓の前でたたずむマリアを中心に、イエスの復活の出来事を見てきました。このマリアの姿は皆さんにどのようにうつったでしょうか。悲しみに打ちひしがれ、その悲しみの前に「時」が止まってしまったこのマリアの姿。

日常に起こる様々な問題、病気や老い、避けては通れない死の問題、仕事、家族や友人との関係、また自分の内面の問題、それらに向き合う時、自分の力で何かできるんじゃないか、そう思って状況を変えようと必死になる私がいる。しかし、それには限界がある。自分にはどうしようもできないことにぶつかったとき、それを知ったときに、私たちは疲弊していくんです。自分の無力さに愕然とする。

それはまるで、よみがえられたイエスの遺体を必死に探すマリアのように、本質的な問題からズレて、一番に見なくてはならない、目の前におられる復活のイエスの存在を見落とし、しまっていることがある。そんな盲目さはマリアだけではない。それは紛れもなく私自身だ、そのように思われる。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」とイエスが声をかけてくれても、それがイエスだと気付けないのは、マリアだけでなく、私である。

死がもたらす絶望によって、目や耳、そして心が閉ざされ、イエスが分からなくなっていたマリア。しかし、イエスに「マリア」と、いつものようにその名を呼ばれたとき、目と耳と心が開かれた。そしてイエスが復活し、私と共にいてくださることが分かった。イエスによって七つの悪霊を追い出され、人生が 180 度変わったあの時のように、いやそれ以上に深い慰めと癒し、救いがそこにあった。マリアの人生にもう一度大きな大きな変革がここで起きた。

「復活のイエスと出会う」。それは、人生の変革です。死による絶望は、復活のイエスによって、完全な希望に変わった。恐れと悲しみは消え去り、イエスに与えられた使命に生きるように変えられていく。もちろん、愛する者の死は悲しいです。しかし、イエスにあって、それすらも希望へと変えられていく。

最後にお分ちしたいのは、復活のイエスが呼んでいるのは、マリアだけの名前だけではないということです。ここにいるお一人お一人のその名前を「今」も呼んでおられる。復活の主は心に向け、私の名前を呼んでくださるイエスともう一度出会いたいのです。

もし私たちがこのイエスの呼びかけにマリアのように応えるなら、復活のイエスと共に生きる、という人生最大の祝福をいただくことができます。忙しく、慌ただしく、行き詰まりを感じるような私たちの日常がある。私たちの耳は、私たちの目は、私たちの心は、自分を守るために、傷つかないように、傷つきたくない、と閉じようとしていきます。しかし、私のその現実をすべて知っている復活のイエスが、私の名を呼んでくださる。だから私は、イエスの御声を聴き続けたい。イエスの歩まれた道をたどり、御言葉に心を開き、今日も生きていきたいんです。それが復活の主イエスと出会う、ということです。

私の名前を呼んでくださる、このイエスに招かれていることを今朝共に覚えたいのです。絶望の淵にたたずむ歩みから、希望を握って遣わされる者になれる喜びを信じて、それぞれの場所に遣わされていきましょう。